



## お互いを知って助け合う ～聴覚障害者団体の防災への取組～



東京都荒川区 荒川区聴覚障害者協会  
会長 大石 泰延

聴覚障害者は耳が聞こえない為、防災への関心が薄い方が少なくありません。それは、常に身近に手話によって情報を提供してくれる人が居ないことが多く、地域交流も乏しいことから、災害への準備についても他者の意見やアドバイスも受け取ることが出来ないため、何をしても良いか分からないのです。

聴覚障害者は情報障害であり、災害障害であるとも言われています。

東京都聴覚障害者連盟傘下の各区ろう者協会には東日本大震災以前から災害対策部を設置している協会はありましたが、その当時の荒川区聴覚障害者協会には設置されていませんでした。しかし、2011年3月11日の震災を受け、現地では逃げ遅れて被災したろう者の情報も報じられ、日本中のろう者が大きな不安を抱きました。災害発生時だけではなく避難所においても情報を得る事が困難な為、ろう者が孤立する事は容易に想像することがで

きることから、当協会では直ぐに手話通訳者の会や手話サークル等と協力し、予め区内7か所のろう者避難所を定め、地域のろう者だけではなく、手話通訳者や支援者にも周知するために、避難所マップの作成に着手しました。

聴覚障害者は災害が発生を知らせる緊急警報や避難指示等の放送を聞くことができない為、聴者に比べて対応や避難が遅れることにより命を落としてしまう確率が高いとされています。これらを少しでも改善するためには近隣住民皆さんの支援が必要となる為、ろう者も自らが積極的に地域交流を行わなくてはならない



教育講座（消防署による Net119 登録説明会）



避難所開設運営訓練の様子



あらBOSA配付資料 1



あらBOSA配付資料 2

と感じています。

ろう者の第一言語は日本手話であり、いわゆる日本語を理解する事が困難な方もいます。聴者の皆さんは「手話がわからないから意思疎通できない」と感じている方も多いと思いますが、コミュニケーション手段は手話だけではありません。口話（読唇）や表情、身振りや簡潔な文章による筆談等でも伝えることができます。

2015年に荒川区聴覚障害者協会では災害対策会議を立ち上げ、登録手話通訳者の会を始め、区内手話サークル3団体、要約筆記サークル並びに中途失聴・難聴者荒川小鳩の会、さらには荒川区障害者福祉課、防災課や社会福祉協議会等とも意見交換を継続的に行い、ろう者避難所を4か所に定め、災害時の手話通訳者派

遣支援等の実現に向けて議論を重ねています。しかし、我々だけでなく手話通訳者が被災者となり十分な体制確保ができないことも考えられることから、代替手段として遠隔手話通訳サービス等の活用も進めていかななくてはなりません。

また、地域の避難訓練等の運営にも積極的に参加し、ミニ手話講座を行う等して手話普及についても力を注いできました。これらの活動に加え、障害者を取り巻く環境改善やバリアフリーの取り組みも進み、行政から支給された緊急通報システム（見える・聴ける防災無線タブレット）や火災警報器、あらかじめ安心カード、ヘルプカード、荒川区コミュニケーション支援ボード、荒川区災害情報アプリ等は非常に心強いツールとして活用させていただいています。

荒川区手話講習会では東日本大震災以降、カリキュラムに災害時の支援に関するグループワークを組み込み、手話学習者にろう者への支援の必要性和その意識を高める活動も行ってきました。

これからも当協会では積極的に地域との関りを深め、一丸となって災害対策に取り組んでいきます。



荒川区コミュニケーション支援ボード